

現象学の根本動機

——ハイデガーの存在論とラスクの論理学——

西 尾 大 樹

「あなたと私が現象学だ！」⁽¹⁾——ハイデガーに投げかけられたフッサールのこの言葉が象徴しているように、ハイデガーはフッサール現象学の強い影響下で思索を形成していった。しかし、主著『存在と時間』（1927年）を著した時には、既に彼の思索は「現象学」の一語では語れなくなっており、フッサールもまた『存在と時間』に対して明らかに不快感を表明するようになっていた⁽²⁾。両者に何故そのような齟齬が生じたのか。この問題はこれまでにもしっかりと論じられてきたが、彼らの思索の偉大さは、今なおそこに議論の余地を提供し続けている。

本稿では、ここに新たな視野を与えてくれるであろう人物として、E. ラスク（Emil Lask 1875–1915）を採り上げたい。哲学史上、それほど認知されているとは言い難い彼ではあるが、しかし、ハイデガーはラスクを次のように評価している。「エミール・ラスクの研究に私個人は負うところが大きい。……彼は現象学への途上にあつたと私は確信している」（GA 56/57. 180）。ハイデガーは、ラスクからの影響を認めるだけではなく、彼が現象学に近い思索を展開していたとさえ指摘するのである。ただし、ラスクは現象学の根本動機を取り上げることがなかったため現象学に踏み込むことはなかった、としてハイデガーは‘及第点’を与えはしなかった（Vgl, GA 56/57. 177）。現象学の途上にありながらもその根本動機を取り逃がしたとされるラスクの哲学とは一体どのようなものであったのか。ハイデガーに影響を与えたラスクの思索を、ハイデガーやフッサールの目指した現象学と比較検討することで、ハイデガーの存

在の思索形成に至る新たな一面を描き出すことを試みたい。

1. ラスクの「哲学の論理学」

リッケルトを師とし、新カント学派の一人に位置づけられる E. ラスクは、第一次世界大戦の最中、40歳の若さで戦死した。そのため、彼が残した主要な著作は『哲学の論理学と範疇論』（1911年）・『判断論』（1912年）だけであり、この二作品にしてもラスクの目指す「哲学の論理学」構築のためのプログラムに過ぎなかった。だが、まさにこのプログラムがハイデガーに大きな影響を与えたのである。そのようなラスク独自の思索は彼のカント解釈、より詳しく言えばカントのコペルニクスの転回についての解釈において顕著に見てとれる。

従来の哲学史においては、プラトンに代表されるように、世界を感性的な世界（感性界）と非感性的な世界（イデア界）とに分ける二世界説で理解しようとする流れが大勢を占めていた。カントはそこに非感性的な範疇、つまり非感性的形式を、感性的な質料とともに感性界の要素として取り入れ、感性界のなかだけでそれら両者の統一を求めることによって、西洋形而上学に新たな地平を開いたとされている。しかし、ラスクはこのコペルニクスの転回が主観客観の関係においてのみ適用されるのでは不十分と考えたのである。大抵のカント解釈者は、そのような主観客観関係における判断する主観の優位をコペルニクスの転回のコアと考えたのであるが、ラスクはそのような判断する主観の優位ではなく、言わば判断される対象の優位を主張するのである。

判断される対象の優位とは、例えば主観によって対象が判断される場合、それは主観による判断に全てが委ねられるのではなく、判断主観を超越した「形式と質料の融合の論理」によって予め判断が方向づけられている、というものである。そのような「形式と質料の融合の論理」は、まさに形式と質料の関係を超越するところの論理であり、しかし、そうでありながらも、これは感性界とイデア界という二世界を基にした上でしか認識することはできない。そのた

め、ラスクはこの「形式と質料の融合の論理」を、二世界そのものを質料に見立てた上での形式として理解されるべきものとして、「形式の形式」とか「哲学的範疇」などと呼ぶ。このような「哲学的範疇」の認識がラスクの狙いであり、ここに従来のカント解釈者には見られない、彼の独自性があった。即ち、感性界における「非感性的なもの」の析出を果たしたコペルニクスの転回ではない、感性界とイデア界、この二世界を質料と見立てた上での「非感性的なもの」の析出がラスクの目的だったのである。

そこでラスクは、範疇の領域を感性的なもの（存在領域）と非感性的なもの（妥当領域）とに分けて考えた。この二重世界（領域）は、妥当する形相が範疇として必然的に感性的質料に関係しているため、プラトンの二世界説とは異なる。ラスクはこの二重世界説をもとにして、哲学が哲学を反省することを可能にする学の樹立を目指し、それを「哲学の論理学」と呼んだのである。「かつてほとんど一度も耕されたことのない論理学の領域をこのように開墾して、認識概念及び範疇概念を拡張すること、即ち、理論的なものの全範囲にはつきりした省察を向けることによって、如何なる基本的な帰結を正しく範疇論に導くことが出来るのか」（EL. 20）、ラスクの「哲学の論理学」へ向かうこの問題意識は新たな哲学的認識の模索であった。「カントの「自然認識的理性の批判」に対して、まず第一に「哲学的認識理性の批判」を対峙させる」（EL. 21）ことをラスクは高らかに宣言するのである。

そのようなラスクにとって、認識するということは論理的に限定すること、つまり、経験において感覚的に与えられる論理的に裸な（**logisch nackt**）質料を、論理的な構造をもっている範疇的な述語で限定することであった。認識する主観は、言わば常に対象を歪曲し、逆に、妥当するもの（真なるもの）は、主観に対しては規範（当為）としてのみ現れるということになる。これらは判断作用の中で成立するため、判断における主語と述語の結合は、「然り」（Ja）という場合は「正しい」（**richtig**）、「否」（**Nein**）という場合は「誤り」（**falsch**）であるにすぎず、「真」（**wahr**）とは言えないことになる。そのため、真理は「知性と事物との一致」と言われるような判断に拠ったものではな

く、質料が形式によって規定されているということが、それ以上遡及不可能な真理であるとラスクは考え、その真理の明晰性を「もはや論理的に裸のまま存在するのではなく、論理的な未規定性から引き離され、論理的なラベル付けがなされ、範疇による述語付けが付与されているものとして現れること」(EL. 64)とまで規定している。そのような真理に拠って、形式に規定される質料というものをより一層考察していこうとしたラスクは、妥当領域においても形式と質料とを区別しようとする。そのような中で、彼は「論理的なものをその源泉において学び知ろうとするものは、感性的な或物の「存在」という賓辞を専ら研究してみなければならない」(EL. 58)と述べている。これはまるで存在の問いに向かったハイデガーの言葉のようにも聞こえ、「「存在」範疇は感性的なものに対する原本範疇(Die Kategorie)に他ならない。……それゆえにこの範疇を「領域範疇」(Gebietskategorie)と名付けよう」(EL. 60)という言葉はそのまま我々を領域的存在論へと誘ってくれるかのようである。

2. 新しい、生の哲学

上述のラスクの「哲学の論理学」の概略からだけでも、それがハイデガーの思索に近接したものであろうことは想像に難くない。しかし、「現象学の途上にありながらも、その根本動機を取り上げることはなかった」とのハイデガーによるラスク評の真意はまだ明らかではない。そこで、ひとまず日本の哲学者田辺元によるラスクとハイデガー両者に対する解釈を採り上げたい。というのも、田辺は1924年、「現象学における新しき転向」という小論でハイデガーを、翌1925年、「ラスクの論理」という小論でラスクを日本に紹介し、彼らを高く評価しているのである。田辺が彼らの如何なる点を評価したのかを検討することで、彼らの思索の根本動機を探る糸口としたい。

田辺は「現象学における新しき転向」という小論において、ハイデガーによる新たな現象学を「生の現象学」と呼び⁽³⁾、これを次のように評価している。

現象学が一つの大きな潮流となり得るのは、それが「厳密な学としての哲

学」でありながら、同時に「生の哲学」でもありうる可能性を秘めているからである。新カント学派の先験形式主義は「生よりの隔たり」(Lebensferne)を孕んだために凋落の一途を辿っている。そうではなくて、「生そのものの真相を具体的に理解し、その中から生ける力をつかみ取らん」(TH. 19)とする生の哲学の実現を人々は現象学に期待している、というのである。しかし、フッサールの現象学に対しては「現実と絶縁し可能的意識の本質を観照しようとするものとして完全な具体性を有するとは言ふことは出来ぬ」(TH. 22)と難色を示し、逆にハイデガーに田辺は期待を寄せるのである。当時、ハイデガーの1923年夏学期講義『存在論(事実性の解釈学)』を直に聴講していた田辺にとって、彼の標榜する解釈学的現象学こそが「最も具体的なる精神生活の現象学」と映ったのである(Vgl. TH. 29)。つまり、田辺はハイデガーに「生の哲学」としての現象学を期待していたのである。

では、ラスクに対してはどうであろうか。田辺は1925年、京都大学で「ラスクの客観的論理。フッサールの純粹論理学及び現象学の批判的解説を内容とする純粹論理学と現象学」という題目の特殊講義を行い、それを「ラスクの論理」という小論にまとめている。

それによると、ラスクは哲学の全領域に適用される範疇として妥当を考えたが、このような究極の範疇を求めると、感性的な質料は没意味的な感性的直観的あるものになる一方で、統一的一般的な領域範疇としての「存在」が、没意味的な感性的質料の特殊化によって求められることになる。そこで、一定の意味範疇がそれに相当する範疇材料に対して *hingelten* するという原始形式が求められ、この「*Hingelten* の原始形式が最後の根拠価値」(TH. 146)となる。このような原始形式を我々が振り返ることは、原始形式(構成的範疇)を対象とする反省的形式(反省的範疇)に関わるものとなり、一見このような事態は、反省的範疇が構成的範疇の模写となって従属的位置におとしめられていると考えられそうである。しかし、反省的範疇は単なる模写ではなく、構成的範疇に対して類的一般の関係を有し、我々はその類的一般の関係によって初めて構成的範疇の対象を把握することが可能となるのである。つまり、反省的範

疇のない、構成的範疇による原始形式ということこそが不可能となり、逆に「対象論理の原型的優先と判断論理の反省的模写性」(TH. 147)が相互に認められることになるというのである。これは、先述の「判断される対象の優位」・「判断主観を超越した「形式と質料の融合の論理」」の議論に関することであるが、田辺はそこに次のような苦言を呈する。つまり、もしそうであればラスクの範疇論は、リッケルトが批判するように、模写主義的実在論（論理的客観主義）に陥る危険性を孕んでいるのではないかと。田辺は、そのようなラスクの論理的客観主義的側面をカントのコペルニクスの転回の意図を汲み取り得ないものとして批判し、客観に対する主観の優位を何らかの意味において堅持する必要性を説く。

そこで田辺は、主観を意識の総合的統一という意味に解し、判断に先立って即自的に範疇的統一を含む直観の権能を認めることで両者の総合を図ろうとしたのである。田辺は、リッケルトもラスクも直観を議論する場合、感性的で論理的に裸な質料のみしか念頭においていないが、カントは直観にも形式的な直観を認めており、形式的統一や絶対の対象性をも含んでいると指摘する。そして、そう理解すれば、ラスクの言う具体的に *originär gebend* な直観が、形式内容の直接融合としての対象の所在ともなり、カントの批判主義を維持しつつ超対立的対象を打ち立てることが出来るのでは、と提案するのである。ただし田辺は、対象は初めから意識の総合的統一としての主観と相関的に成立するのであって、判断は「直観の即自なる形式内容の統一が、分裂を通してより高き自覚せられた統一に進む」(TH. 149)ものであるとしている。ここで彼は「このような判断の対立性の構造が、現象学の意味志向充実の認識本質の分析と相一致する所多いのは、客観主義に徹するとき自ら主観の現象学的分析と呼応する所に達することを示すものとして興味が深い」(TH. 149)とし、現象学との類縁性を指摘することになる。田辺のラスク評は極言すれば、存在という領域範疇の論理的分析による創出、という点にあったようだが、ただそこで、ラスクに全面的な賛同を示すのではなく、逆にそのような事態を的確に捉えているのは現象学の方であるとして、「今日の現象学の思想の方がカント派

の論理説よりも却ってカントの精神により近い」(TH. 158)と主張するのである。

このように田辺は、ハイデガーに「生の現象学」を期待し、またラスクの論理学をも現象学に引き寄せて議論を展開している。とすれば、ハイデガーの言う「現象学の根本動機」とは「生の哲学」のことであり、ラスクが取り逃がしたのも「生の哲学」なのであろうか。しかし、そうとは言えそうにない。ラスクは『哲学の論理学と範疇論』の後半「哲学的認識」という章において「生と認識」という一節を設け、こう述べている。

「一方において、「生きること」(Leben)と「思索すること」(Spekulation)とが別物であることがはっきり言い表されているのと同時に、他方においては、しかしなお、「思索すること」は何らかの仕方で「生きること」の範域から取り出された質料の上に築き上げられていることも言い表されている」(EL. 159)。

これまで「論理」を徹底的に議論していたラスクの姿を思い起こせば一見奇異に映る一文ではあるが、彼の目指す「哲学の論理学」とはまさにこの「生きること」と「思索すること」の相即不離の関係を扱うことであった。そこにはラスクの、言うなれば「より良き生への渴望」が観て取れる。「直接的体験は、非感性的なものにおける単なる「生」であり「自己喪失」である。それ故、まさに非認識であり、非知識的で、非反省的な、その限り素朴的な、何らの「思想」や明晰性によって錯乱されていない態度である。自己が「行い」或いは「生きる」ところのものそのものを「知ら」ない体験である」(EL. 159)。ラスクは、そのような日常生活の「単なる生」を敬遠し、そのような「非認識」ではない「生」を目指して、哲学的認識を求めたと言ってよからう。

このことを鑑みると、ラスクの「哲学の論理学」はまた違った様相を呈してくる。即ち、ラスクにとって、「哲学の論理学」のための範疇論は、現実世界を捉えるための範疇論ではなく、より良き生を捉えるための範疇論なのであ

る。そのような生への衝動から発するラスクの「哲学の論理学」は、「生の哲学」と呼ぶに相応しい資格を備えていると言えよう。「哲学にとって必要なことは、現実的「生」ではなく、それを純粹に視野に入れた上で、「生」の客観を要求すること」(EL. 162)であり、「「生」に値する範域から哲学はその質料を採用するのであるが、無論、「生」の事実性によって一つの新しい原野が哲学的考察に対して開けてくるのである」(EL. 164)とのラスクの言葉には、新たな「生の哲学」を目指そうとする彼の思索の根本動機がはっきりと窺て取れよう。とすれば、仮にハイデガーの言う「現象学の根本動機」が田辺の言う「生の現象学」であれば、未完成ながらもラスクはその根本動機を共有していたのではなかろうか。しかし、ハイデガーは確かにこう述べていた。「ラスクは現象学の根本動機を取り逃がした」と。ハイデガーにとっての「現象学」がいかなるものであったのか。「現象学の途上にありながらも、その根本動機を取り逃がした」というハイデガーの言葉の真意をいよいよ探ることにしたい。

3. 現象学への途上

フッサールに直接師事する1916年以前から『論理学研究』を熟読していたハイデガーは、しかし後年、「現象学へ向かった私の道」(1963年)において次のような述懐を行っている。「私の努力は徒労であった。というのも、……私は正しい仕方で求めていなかったのだから」(ZD. 82)。ハイデガーは、F. プレンターノの著作によって目覚めた存在への問いが、彼の弟子であったフッサールの『論理学研究』によって大きく推進されることを期待していたが、その期待はすぐには成就されなかった、というのである。当時ハイデガーは『論理学研究』に魅せられていながらも、「一体何が私を魅了したのかを十分に洞察することなしに、数年間、常に繰り返しその著作を読み耽っていた」(ZD. 82)状態だったのである。

転機はラスクとの出会いであった。「ラスクの二つの著作、『哲学の論理学と範疇論』(1911年)と『判断論』(1912年)はそれ自身、フッサールの『論理

学研究』の影響を十分に明らかに示していた。このような事情が私をフッサールの著作をあらためて徹底的に研究するように仕向けたのだ」(ZD. 83)。ハイデガーはラスクがフッサールの現象学に注目していることを知って、再びフッサールの『論理学研究』に立ち戻ったというのである。とすれば、ラスクは「現象学の途上の人」というだけでなく、ハイデガーを「現象学へ呼び戻した人」とも言えるのではなからうか。もしそうであれば如何なる「現象学」へだったのだろうか。

ハイデガーは1919年夏学期講義「現象学と超越論的価値哲学」において、ラスクを高く評価している。ただし、この時すでにハイデガーの現象学はフッサールのそれとは微妙に異なるものとなっていた。彼はこの講義で「現象学的な批判は、精神的な生一般の真性なる真理の根源を見ること、それを見えるようにすることを積極的な目標としている」(GA 56/57. 127)と明言している。この言葉には生と彼独自の真理概念との連関が予測できる。

「真理が判断のうちに含まれている」ことはアリストテレス以来、自明なことでとされてきた。しかしハイデガーはそれに満足せず、判断自体が意味を持つためには、そこに認識作用についての意識内容を越えた尺度が必要になると言う。つまり、判断においては単なる表象に、表象的ではない要素が加わってくるというのである。

ハイデガーはそこで、『論理学研究』からの影響として、リッケルトの感情についての分析を採り上げる。様々な感情の中からリッケルトは「確信」(明証性)という快の感情を取り出してくる。「明証性とは、心理学的に見れば快の感情の一つであるが、判断に無時間的な妥当を与え、そのことでそれに価値を与えるものである。と同時に、私は自分が明証性の感情によって拘束されていることを体験する。つまり恣意的に肯定したり否定したりは、私にはできない」(GA. 56/57. 188)。つまり、明証性という感情は、判断に必然性という性格を与えるのである。ただし、この必然性は、「ねばならない」(Müssen)のではなく「べきである」(Sollen)の必然性であり、判断の真理は判断によって承認されるべき価値(Sollen)の助けを借りることでのみ定義できるとい

う。「判断に価値が備わってくるのは、判断が真理であるからではなく、むしろ、判断に価値が備わるから、判断は真理なのである」(GA. 56/57. 188)。ハイデガーはリッケルトのこの議論をさらに充実させた人物として、ラスクを評価するのである。先述のように、ラスクにとっても、妥当するものが真なるものとなり、それは主観に対して規範(当為)として現れるだけであったが、そこからラスクは、真理が「知性と事物との合致」と言われるような判断に由ったのではなく、質料が形式によって規定されているということ自体が、それ以上遡及不可能な真理であるとしていた。

ハイデガーは後に、このようなラスクに類似した真理論を展開している。1925年夏学期講義でハイデガーは、究極の充実化が真理と存在という現象学的な概念へ結びつくことを論じている。つまり、「直観される事象そのもの—(モノ〈res〉)—への思念されるもの—知性〈intellectus〉—の適合—一致〈adaequatio〉」こそが究極の充実化であるとし、さらにそれを現象学的に解釈して、「一致〈adaequatio〉とは現象学的に理解すると、合致—へ—もたらし仕方(Weise des Zur-Deckung-bringens)におけるこの適合(Anmessung)」であるとする(Vgl. GA 20. 69)。このような思念されるものと直観されるものとの同一化の現象を真理の三概念、即ち、①思念されるものと直観されるものが同一的に有ること、②合致的同一化としての明証性そのものの作用構造、③認識を真にする、と説明する。そのように同一的に有らしめる、つまり、真たらしめる作用構造から「真に有る」という意味での存在の一定の意味が得られるというのである。ハイデガーにとって真理が存在と不可分の関係にあることがここで確認できるが、それはラスクの真理概念からも伺えるのである。

「あるものが事実そのようであるということは、言うまでもなく、それが真実そのようである(真理のうちにある)ということに他ならない」(EL. 26)。このラスクの言葉がハイデガーの真理概念に通じているのは明らかであろう。少なくとも、「現象学が真理概念を関係づける作用、判断に制限することを断ち切った」(GA 20. 73)とのハイデガーの言葉には、ラスクの思索と

の類似性を観て取ることができる。ハイデガーはこの議論の延長線上に範疇的直観の分析を行なったのである。そして範疇的直観、ここにもラスクとのさらなる関係が垣間見えるのである。

『存在と時間』において、ハイデガーがラスクに言及しているのはわずか一箇所注のみである。だが、この注はとても興味深い。少し長いので、その一部だけを引用する。

「現象学的真理論についての通例の叙述は、批判的な「プロレゴメナ」（第一巻）で説かれている事柄のみに限定され、ボルツァーノの命題論との連関を記載している。これに反して、ボルツァーノの理論とは根本的に異なる積極的な現象学的解釈は放置されている。現象学的研究の外部で上記の考究を積極的に採用した唯一の人物は E. ラスクであって、彼の『判断論』が明証と真理に関する上記の数節によって強く規定されているのと同様、彼の『哲学の論理学』も、第六研究（「感性的直観と範疇的直観について」128 頁以下）によって強く規定されている。」（SZ. 218）

この注は、ラスクの思索が、『論理学研究』に強く影響されているというだけではなく、特に範疇的直観と大きく関わっていることを示唆している。そしてこれこそが、ハイデガーを「現象学へ呼び戻した人」というラスク像を決定づけるものである。というのも、後年、「ハイデガーにとっての本質的な原動力となったフッサールの決定的な寄与」（GA 15. 377）と回想されるこの範疇的直観の理解に、ラスクの思索が関係していたというのである。

そもそも範疇的直観は、フッサールが『論理学研究』において「明証と真理」の議論の後に分析したものである。知覚される感性的な対象は感性的直観によって与えられるが、例えばそのような知覚を「この紙は白い」と言明した場合、すでに「S は P である」という形式に則っており、これは「紙」や「白」が感性的に直観されたというだけでは説明がつかなくなる。このような「S は P である」という事態はどのように直観されるのか、このことを説明す

るためにフッサールが持ち出したのが範疇的直観であった。

我々が「この紙は白い」と言う、この場合の言表の充実化はどう理解すべきか。この疑問にフッサールは、言葉で知覚を表現する場合、その紙は白(weiß)として認識されるのではなく、むしろ白いもの(Weißes)として認識されるのであり、「白いものとは白‘である’紙のことである」という。そしてそこから、このような‘である’という繫辞の形式、つまり、存在の形式を取り出すのである。フッサールは「存在は決して知覚可能なものではない」(Hu 19/2. 666)ことは認めつつ、しかしそれらはあくまでも知覚などの感性的直観に基づけられているとする。それ故、範疇的直観は、感性的直観に基づけられていながらも、しかし感性的直観に拠った対象とは別の新たな対象性を与えることになるのである。

このようなフッサールの範疇的直観の分析をハイデガーが高く評価したのは、そこに存在への萌芽を見出したからである。仮に、ラスクのおかげでハイデガーがこの範疇的直観を‘正しく’理解することが可能になったというのなら、ハイデガーを存在の思索へ導いたのは、フッサールだけではなく、ラスクでもあったと言えよう。

ラスクは『哲学の論理学と範疇論』において、こう述べている。「『存在』は古代においてそうであったように構成的対象性を意味する」(EL. 199)。「『存在』は格別に最高十全な構成的性格を持つのである」(EL. 190)。このように、ラスクは「存在」を構成的なものとして捉えるのだが、また同時に、感性的直観だけでは把握できないことも認めていた。「存在領域を探究する者は、言うまでもなく存在を認識しはしない。彼はただ存在者について知るのであって、存在について知りはしない。……彼は「存在」について知ることはなく、論理的形式としてただ「体験」するだけなのである」(EL. 98)。そしてそのような「体験」を可能とするために、ラスクは反省哲学の必要性を説くのである。「我々は単に「或もの」や「有る」、あるいは無規定な関係を拭い去ることができなかったばかりでなく、「及び」や「異なる」、存立、総体、多数性、多様性、種類、群、一般性、特殊性、個的剰余、分化性等々の範疇、及び範疇を

含む言葉を必要とする。その限り、快く告白しなければならない。絶え間なく「反省哲学」が行なわれなければならないと」(EL. 136)。

このようにラスクが「存在」を構成的なものとして捉え、反省哲学の必要性を説いたことは、フッサールの現象学、そして範疇的直観に通じるものがある。そのようなラスクをハイデガーは評価したのである。「論理的なものを形而上学的存在者に「実体化」する典型例としては、今でもプラトンが挙げられよう。ラスクはその要求を『哲学の論理学』に関する広範で透徹した研究のなかではっきりと掲げ、それと同時に、哲学を価値学として概念的により明確に規定するための道を切り拓いたのである。その研究全体は、超越論的論理学を深め、継承発展させていくというものである。それが継承発展だと言うのは、範疇の問題をただ感性的存在者にだけ制限したカントに対して、ラスクは範疇のために「新たな適用領域」、即ち哲学そのものを獲得しているからである。つまりラスクが追求するのは、思考可能なものの一切をその隠れた二つの領域、即ち存在者と妥当者によって包括する範疇論に他ならない」(GA 1. 24)。ハイデガーのこの言葉は、フッサールの範疇的直観に匹敵する示唆をラスクの範疇論からハイデガーが受けていたであろうことを示している。『存在と時間』でなされたラスクに対する唯一の言及は、しかし、そこにフッサールの現象学にハイデガーを立ち戻らせた彼の大きな影響の痕跡を見て取ることができるのである。

4. 現象学の根本動機

これまでの考察で、ハイデガーがラスクを「現象学の途上の人」と評したことはある程度納得できよう。だがしかし、「現象学の根本動機を取り上げなかった」との評価はどうであろうか。そもそもハイデガーの言う「現象学の根本動機」とは何か。それを検討するために、まずは創始者であるフッサール自身による現象学の根本動機から確認を始めた。

フッサールは通称「ブリタニカ草稿」と呼ばれる、現象学を簡潔に説明した

文章の冒頭で、その使命を「厳密に学問的な哲学のための原理的な機関（オルガノン）を提供すること」（Hu 9. 277）としている。つまり、彼は諸学を基礎づける学問として現象学を標榜したのであり、フッサールにとっての現象学の根本動機とはそのようなオルガノンの確立にあったと言ってもよかろう。そのために、フッサールは意識の志向的体験の普遍的記述を目指し、その意識の普遍的な本質性格の記述のために、判断中止し、反省を行なう必要性を説くのである。このフッサールの試みがそれまでの認識論の図式を大きく揺るがし、周囲の思索者にも様々に受容されたのである。その一例として、例えば先述の田辺は「生の哲学」となる現象学を求め、それをハイデガーの解釈学的現象学に期待した。ただ、ハイデガーの解釈学的現象学の根本動機は、フッサールのそれとは異なっていたのである。

周知のように、ハイデガーが『存在と時間』において展開したのは、基礎的存在論であり、現象学はその方法概念と位置づけられていた。ハイデガーにとって現象学は存在論となって現れるのである。「現象学とは……存在論である」（SZ. 37）。「哲学は、普遍的な現象学的存在論であって、現存在の解釈学から出発する」（SZ. 38）。これらの言葉からも明らかなように、ハイデガーにとっての現象学の根本動機には存在論への志向が潜んでいる。しかし、現象学と存在論を並列したのはフッサールも同じであった。「ブリタニカ草稿」には「存在論としての超越論的現象学」という一節があり、そこで「超越論的現象学は、……存在者一般がそこで構成されるところの超越論的な志向的生としての超越論的主観性そのものの存在も扱うのである。従って、実際に遂行される現象学は……真に普遍的な存在論なのである」（Hu 9. 296-297）と述べており、フッサールも彼なりの存在論を試みていたことがわかる。

では、ハイデガーの普遍的な現象学的存在論と、フッサールの普遍的な存在論、両者の違いはどこにあるのであろうか。ハイデガーは、フッサールとの「ブリタニカ草稿」共同執筆の段階（1927年10月）において、フッサールへの手紙の中で、「「世界」と呼ぶものの意味での存在者は、それと同じ存在様式をもつ存在者に立ち戻ることによっては、その超越論的構成に関して解明され

ることはできない」(Hu 9. 601) ことを認めつつ、「しかし、そのことによって超越論的なものの場所を作り上げているものは総じて存在者ではないものということが言われているわけではありません。むしろ、そのことによってまさに問題が生じてくるのです。即ちそのなかで「世界」が構成されてくるところの存在者の存在様式は、どのようなものであるのか、という問題です。これこそが『存在と時間』の中心問題、つまり基礎的存在論です」(Hu 9. 601)と異を唱えている。これは、フッサールの言う「存在者一般がそこで構成されるところの超越論的主観性」に対するハイデガーと彼との見解の相違を如実に示している。ハイデガーは、そのように「世界」とは別次元での超越論的主観性を想定することに難色を示しているのである。故に、ハイデガーにとっての現象学的存在論は、現存在の現象学であり、それは自ずと現存在の解釈学ともなるのである。

このようなハイデガー独自の現象学・解釈学・存在論の連関の萌芽は、前に触れた 1919 年夏学期講義においても既に見られる。ハイデガーは、「デイルタイの生涯のこの秘かな憧憬をかなえようとしているのが現象学である」(GA 56/57. 165) として、解釈学と現象学との「融合」をすでに示唆している。細川亮一氏はこれを「デイルタイと現象学との総合としての「事実的生の解釈学的現象学」という理念の成立」⁽⁴⁾と表現しているが、この場合の事実的生がどのようなものであるのか、また、その事実的生への接近を可能とする方途はどこから得られたのであろうか。ここにもラスクの影響を見て取ることが出来るのである。ハイデガーはこう述べている。「ラスクは究極的な被体験性としての当為と価値とのうちに世界そのものを発見したのであり、この世界は即物的でも感性的に形而上学的でもなく、しかしまた同様に、非-即物的でも極端に思い上がった思弁でもない、むしろ事実的な世界だったのである。この根本的な確信が、ひとつの世界観を可能としたのである」(GA 56/57. 122)。ハイデガーにとっての哲学は、フッサールのような諸学を基礎づけるための哲学であるのみならず、世界観の哲学とも言うべき、生(事実性)を汲み取る哲学でなければならなかったのである。ラスクの思索には、フッサールには見られな

い、そのような事實的生の解釈学的現象学への萌芽も期待することが出来たのではなかろうか。それ故ハイデガー自身、ラスクの「哲学の論理学」をこのように高く評価したのであろう。

結 語

本稿ではラスクの思索を検討することで、ハイデガーの存在の思索形成に至る新たな一面を描き出すことを試みてきた。ハイデガーのフッサール現象学への回帰と、そこからの離脱が、ラスクの思索を射程に入れることでより鮮明に浮かび上がって来ようとしているのではなかろうか。確かに、仮に彼が生きながらえて「哲学の論理学」を完成させたとしても、そこで何らかの存在論が展開されていたかは疑問である。ハイデガーにとっての現象学が存在論への方法概念であったとすれば、ラスクが現象学の根本動機、つまり「存在論へ続く現象学」を取り逃がしたと評されることはやむを得ないかもしれない。だが、彼の思索がハイデガーをそのような「現象学」へ呼び戻したことは認めてもよいであろう。

ハイデガーが存在の問いを展開し得たのは、確かにハイデガーなればこそであったろう。しかしそこには、当時の思索者たちの願ってやまない「生の哲学」への渴望があったとも言えるのではなかろうか。それを森秀樹氏は「19世紀末の思想状況から生い育った「共通感覚」」⁽⁵⁾と述べているが、このような共通感覚が、ラスクを「哲学の論理学」へ駆り立て、ハイデガーの『存在と時間』を準備したのではなかろうか。そしてまた、この「共通感覚」に対するスタンスの違いが、フッサールとハイデガー両者の分岐点となり、さらにはラスクとハイデガーの求めた「事実性の思索」を必然的に「存在の思索」へと移行させたのではなかろうか。つまり、ハイデガーがフッサールから離れて存在の問いに向かうことは、ハイデガーを現象学へ呼び戻したラスクの思想にもすでにある程度内包されていたのではなかろうか。生と真理と存在へ向かう哲学的認識を、確かにラスクも求めていたのである。ハイデガーはこのラスクの衣

鉢をも継承していったと言えるであろう。

注

- (1) H. -G. Gadamer, “Erinnerungen an Heideggers Anfänge”, in “Dilthey-Jahrbuch”, Bd 4, S. 18.
- (2) フッサールは『存在と時間』を熟読し終えた頃, 「私はハイデガーの著作を私の現象学の枠に組み入れることが出来ないし, 残念なことに私は徹頭徹尾, また本質的に内容の点でも拒否せざるを得ない」と述べている (Vgl, “Briefe an Roman Ingarden”, Martinus Nijhoff, 1968. S. 56.)。
- (3) この小論のタイトルは『現象学における新しき転向——ハイデガーの生の現象学——』である。
- (4) 細川亮一『意味・真理・場所——ハイデガー思惟の道』, 1992. 2, 創文社, 93頁。
- (5) 森 秀樹「新カント学派の挫折の意義——リッカートとラスクの対決が生み出したもの」, in 『アルケー 関西哲学会年報 No. 9』2001, 119 頁。

文献表

引用の際には, 文中において以下の略号に頁数をあてて示した。

Martin Heidegger (1889–1976)

SZ: *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 17. Auflage, 1993.

ZD: *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1969.

※ *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. については, 以下, 巻数とタイトルと発行年数のみを記した。

GA 12: *Unterwegs zur Sprache*, Gesamtausgabe. Bd. 12, 1985.

GA 20: *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, Gesamtausgabe. Bd. 20, 1979.

GA 56/57: *Zur Bestimmung der Philosophie*, Gesamtausgabe. Bd. 56/57, 1987.

Emil Lask (1875–1915)

EL: *Die Logik der Philosophie und die Kategorienlehre, Die Lehre vom Urteil*, Dietrich Schlegelmann Reprintverlag, 2003.

Edmund Husserl (1859–1938)

Hu 9: *Phänomenologische Psychologie Vorlesungen Sommersemester 1925*, hrsg. von Walter Biemel, Husserliana Band IX, Martinus Nijhoff, 1968.

Hu 19/2: *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Zweiterteil*, hrsg. von U. Panzer,

Husserliana BandXIX/2, Martinus Nijhoff, 1984.

田辺 元（1885–1962）

TH 4：『田辺元全集 第4巻』，1963. 10. 筑摩書房。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——